子どもと共に成長する

親たちのグループ

―援助者のためのマニュアル―

（改訂増補）

小野　修

人間関係研究会資料　No.11

はじめに

この小冊子は、不登校とその周辺・近縁の問題に対する一つの援助法の試みの提案である。

先ずは拙著（小野1985，1992）のなかで紹介した『不登校児をもつ親の学習会』のようなことを試みたい方のための手引となればと願っている。全国各地でこのような『親の学習会』を求めている親達が多いので、ぜひお始めいただきたい。

また、不登校ケースへのより有効な援助方法を模索しておられる方々、不登校児の収容・通所機関－情緒障害児短期治療施設・学校不適応児のための適応教室・フリースクールなどで親への援助の必要性をお感じの方々、親を中心とした様々な『不登校児の親の会』などのより一層の深まりを願っていられる方々にとっても、お役にたてばと願っている。あるいは、親を対象とした知識の伝達を主にした『講座』を実施してみて、その講座の内容のより一層の深まりを求めておられる方々にとっても、お役に立つかもしれない。

さらに、エンカウンター・グループ体験を何とか生かしたい方々にも、何かのヒントになるかも知れない。

他のところに書いたもの（小野 1985,1986,1987a,1994 ）との一部重複は避けられないので、お許し願いたい。

初版発行より６年経ち、増刷を機に、その後の経験と資料の整理によって大幅に増補した。特に『援助要因』についての記述を増やして、「なぜ、『親のグループ』が親達にとって役に立つのかをより明らかにしようと努めた。

なお、拙著（小野1985，1992）の併読をお勧めしたい。

１９９４年　７月２６日

１．　基　本　方　針

１．　ここにいう『親のグループ』は、親への援助によって親子関係の改善、ひいては子どもの成長と問題の解消を目指す。そのためには当然親の変化なり成長が先行しなければならない。（子どもの変化なり成長が先行する可能性も否定はしないが、このグループのねらいではない。）

２．　子どもの問題を、子ども本人だけに働きかけて解消しようとする考え方と、その役割は受け入れない。即ち、医師が全責任をもって患者に働きかけて身体的疾患を治療するという『医学モデル』からの脱却を前提としている。このような『親のグループ』実施の体験は、必然的に、さらにこの脱却を確かなものにするであろう。（コーチン 1976 ）

３．　来談者への援助が必要であるから、『親のグループ』を実施する。援助を必要としている人達がいるから『親のグループ』をすすめていく。したがって、来談者への援助を何よりも優先する。何らかの“治療”の理論とか技法の有効性を確認するためではない。

４．　参加希望者は、選択や拒否をしないで受け入れる。これは、上記の３．から必然的に生じる方針である。これによって多くの困難が生じるかもしれないが、結果的には参加者全員にとって有益になる。

５．　この『親のグループ』は、ベーシック・エンカウンター・グループを基礎とする。しかし、ファシリテイターの役割り（４．３．）などでは、変形は避けられない。

2．なぜ親のグループか

2．1．なぜ、親を対象にするか

不登校児などの成長援助のために、なぜ親を対象にするのか？

先ず第１に、子ども本人が来談できないケースへの現実的対応である。『問題の子どもを連れて来られない親』も、まさしく私達の援助対象である。

第２は、子どもの問題形成における親の影響力の問題である。親への援助によって親から子どもへの好ましくない影響力を、好ましい方向へ転換することによって、子どもの問題の軽減ないし解消が可能である。

第３は、第２の延長上の問題であるが、子どもの問題の原因は何かという議論（原因論）と、それをどのように援助するのかという議論（援助方法論）との関係である。例えば、不登校の原因論は、子ども本人の問題とするものから、親・家庭の問題、学校・教育の問題、さらには日本の社会の問題とするものへと拡大してきた。しかし、他の多くの問題の場合と同じように、ではその原因をどのように除去していくかという援助方法論は、それに伴った発展をしていない。そうしたなかで、ここに紹介する方法は、原因論の『親・家庭の問題』に対応する一つの援助法である。

スラブソンは、親を援助の焦点とする理由を、「近年では子どもの親達は日常業務の一部として治療対象と考えられている。それは親、特に母親の幾つかの行動の変化がなければ、思春期前期の子ども達は治療から何も得られないし、また改善されたものの保持ができないからである（Slavson 1958　p．261）。」という。

2．2．　なぜ、グループか

次は、このような援助をなぜグループで行うのかという問題である。

先ず何よりも、グループの方が親達にとってより有効な援助ができできるという、このようなグループのもつ援助要因があるからである。（これについては5．3．で述べる）。グループの方がより有効な援助ができるということを、このようなグループを始めようとする人自身が体験していることが、恐らく不可欠といってよかろう（村山1977，1971．小野1971）。

『ケース数増大への対応』という、極めて現実的な、そして全てのグループ・セラピイに共通の理由であることも挙げておく必要があろう。

3．　参加メンバー

3．1．どのように集めるか

『親のグループ』を必要としている親達がいるから、グループ』をもつのであって、『グループ』を実施するために、親達を集めるのではない。

香川県児童相談所がとっていた方法は、『親のグループ』のスタートが決ると、地区担当の子ども福祉司と心理判定員の手持ちのケースの親達から、参加希望をとる。ただ、この段階で、知的な理解力、定期的通所の可否などは考慮されている。このようにして出てきた希望者と、前に終ったグループ参加者のうちの継続参加希望者とが、次のグループのメンバーになる。

両者がほぼ半々位になるのが例であり、それがまた望ましいメンバー構成のようにも思われる（５．３．）。

私が現在行っているのは、全くのオープン・システムであるので、少しずつメンバーの入れ替わりが見られる。

３．２．　メンバーは何名が適当か

真に『親のグループ』を実施したい人は、例え２人からでも試みを始められるようお勧めしたい。それは、人数が何名以上集らなければできないというものでもないし、２人からでも幾つかの援助要因は間違いなく働くからである。

１グループの参加適正人数は：１）そのグループが１回の集り（セッション）に使える時間内での一人あたりの発言可能時間、２）十分なコミュニケーションができる人数、３）できるだけ多くの援助要因が有効に働くのに十分なだけのメンバーの多様性の確保などを考え合せると、ファシリテイターも含めて１０名から１２、３名であり、どんなに無理をしても１５名までであろう。

私達は、通常１セッションを２時間としているので、私は１０名位が適切な人数ではないかと考えている。

３．３．　どんな　親が参加者か

３．３．１．子どもの問題の形

私達は、『不登校児をもつ親の学習会』として、『親のグループ』を試みてきた。しかし、様々な事情で、不登校児の親ばかりではなく、家庭内暴力、校

内暴力、学校不適応児、不良交遊、異性交遊などの問題をもつ子の親達が参加してきた。このような不登校以外の問題をもつ子どもの親達の参加は、グループの進展の妨げになったというよりも、むしろ多くの刺激を他のメンバーに与えてくれたとすら考えられる。

これらのことから、『不登校』とか『非行』など、単一の問題の親のグループ（『非行児の親のグループ』　林1987）から始め、少しずつ他の問題の子をもつ親も交えていき、グループの運営に熟練してくれば、様々な問題の子をもつ親のグループを開くことができるのではなかろうか。

３．３．２．父親と母親

私達の願い（【付録１．】）とは違って、わが国の男女の家庭での役割分担の現状から両親揃っての参加はむしろ例外で、父親も何回かは出席はするものの、母親のみの参加が圧倒的に多い。それは、父親が子どものために勤務を休むことが容認されるには至っていないわが国の社会状況の反映であろうか、それともグループ運営が父親のニーズに応えられていないのかもしれない。

父親のための夜のセッションを、別に月１回設ける試みも良い結果を生んでいる（村上1992）。

３．３．３．その他の参加者

見学・研修希望者をどのように受け入れるかの問題である。私は事前に全参加者の了承を得るようにしており、一人でも反対があればそれを断っている。

人数は極力少なく、一度に２名以下を原則とする。

これらの参加者達は、自分でも『親のグループ』を始めたい専門家、不登校児の親、不登校児への援助を修士論文のテーマにしている教員養成大学の大学院生、それと不登校ケースを抱える学校の養護教諭であった。

これらの参加者達の立場からの発言も、問題を違った角度からみる可能性を与えてくれる。また、共通して語ってくれる印象は、①予想に反してグループの雰囲気が明るい、②親達がよく話すこと、③ファシリテーターの発言が少ない、という３点である。

３．３．４．参加中断メンバー

どのようなグループにも中断は付きものであり、避けられないであろう。

中断は、主に次の３つの場合であろう。

１）ファシリテーターの問題：態度、姿勢、不登校問題への理解の程度、ファシリテーターとしての力量などが、参加者のニーズに十分応えられない。

２）参加者の期待：名医が難病を治療するように、（欠席日数から留年・退学間際の）子どもを短時間で再登校させる方法を伝授してくれるものとの期待をもってくる親達は少なくない。このような期待をどうしても手放せない親達は、“何も言ってくれない。”“何も教えてくれない。”と『親のグループ』を見限り、期待に即応してくれる“名医”を求めて去っていく。

３）現実直視回避：参加の親達のなかで、①子どもの問題の一部の責任を引き受けなければならない人者、②子どもの問題を軽減・解消し、自立を助けるべき中心的人物というように、自分の置かれた２つの厳しい現実に直面できるだけのある程度の強さなり、他のメンバー達と支えあってその強さを得るだけの社会性をもつ親達は、このグループから多くのものを得る。しかし、それだけの強さを未だもたない、あるいはなかなかもち得ない親達は、この直視に耐えられず、子どもの問題から逃げ出したくなり、グループを去っていく。

１）は『親のグループ』を試み始めた1977~78 年頃の私の姿であり、自分一人張り切っていてもだれも来てくれず、同僚達の手前大変恥ずかしい思いをした。私は、電話・手紙で、「共に学びあっていきましょう」というラブコール

を送り続けて、やっと参加してもらえるようになった。

２）を事前説明によって防止しようとしてもそれほど効果はない。２）３）の場合は、熱心に出席を働きかけ続けるか続けて参加してほしいというこちらの願いを何度か伝えた後で、再来談の門戸を開いておくという対応があろう。

私は自分の能力の限界を認め、“全てのケースを自分の納得できるまで援助したい”という完全主義を捨て、後者を選ぶようになってきた。

４．ファシリテーター

４．１．私達の方法

ファシリテーターは、事情の許すかぎり２人１組が望ましい。

私達は最初、できるだけ多くの児童福祉司にグループを経験をしてもらうために、児童福祉司１名が１期１２回のうちの６回ずつ交代で、グループに入った。この経験は、児童福祉司達にとっては、『親のグループ』でどのようなことが行われるかを知り、自分のケースの親に紹介しやすくなり、またグループの中でのファシリテーターの動きについて理解してもらえるようになった。

次は、このようなグループに関心をもった児童福祉司に、筆者と共に１期１２回を通して入ってもらい、経験を積んでもらった。

そのうちに、私とその同僚は、２人が相補ってより有効に役割りを果たしていることに気付いた。１）私が忘れていた前のセッションのことを覚えていて、発言するメンバー自身も気付いていなかった子どもの変化を指摘してくれ

る；2）私とは違った角度からの見方で発言してくれる；3）私の気付かないことに気付いてくれる；4）私とは違った重みでメンバーの発言を受けとってくれる；などなどである。

4．2．ファシリテーターのための準備

心理臨床の領域では、万全の準備を整えるよりも、先ず臨床活動を始め、進めていくなかで、必要なものは主としてその活動そのものから学びとっていく方が、より実践的ではなかろうか。なぜなら、心理臨床家の援助を今すぐ必要としている人達が目の前に大勢いるにもかかわらず、心理臨床のための研修・訓練を受けられる機会は極めて少ないからである（小野1993 b）。

ただ、私にとって役にたったと思われる経験は：1）子どもの様々なケースを担当したこと；2）不登校児の通所、キャンプ（小野1972）、一時保護（小野1964）、環境療法（教護院、養護施設収容）などを経験したこと；3）人間関係研究会のエンカウンター・グループ（村山1977，村山他1991）へのメンバーとして、またファシリテーターとして参加体験をしたこと（小野1971，1991）などであるが、特に3）の意味が大きかったように思われる。

また、グループ・カウンセリングの経験や、グループ・カウンセラー養成のための訓練も、役に立つのではなかろうか。

私は、最も基本的に重要なのは、子どもや親の変化と成長の可能性をどれだけ信じられるか、あるいは最初は僅かなように見えるその可能性に、どれだけ自分を賭けていけるか、ではないかと思う。

また、参加メンバーを、援助対象として見るのではなくて、こちらが学びとるべきものをもつ人として、あるいは学ぶべきものを共に見つけ出し得る人と

して見ることができるようになることではないかと思う。そうして、臨床家にとって貴重なものを、喜びと興奮で学びとるとき、臨床家としての成長と自信を感じとれる。それはまた、次のセッション、次のグループ、次のクライエントと接する支えになっていく。いわば、臨床家のエネルギーが一方的にクライエントの方に流出していくのではなくて、臨床家もクライエントから汲みとっていけるのである。そうできれば、『バーン・アウト（燃え尽きる）』することもないのではなかろうか（小野1993 b）。

このようにみてくると、その人の人間観なり人生の生き方の問題につながってくる。したがって、ファシリテーターになる準備は、自分の中のそのようなものを変えていく勇気がなければできないことかもしれない。

私達の『親のグループ』を見学された方の、『ファシリテーターの発言が少ない』とういう感想などから推察すると、技術的に最も基本的な準備は、クライエントへの傾聴姿勢を養うことではないかと推察される。

ファシリテーターになるための必要な準備は、要するに、ファシリテーターがどのような役割りを果たせばより有効かということから、当然の帰結として導き出されてくる（次節参照）。

なお、私は1993年より年に１回、２月頃に高松において、１泊２日の《『不登校児をもつ親のグループ』カウンセラー研修講座》を開催している。

４．３．　ファシリテーターの役割り

４．３．１．ファシリテーターの態度と姿勢

１）正直さは、参加者の信頼感を強め、グループへの定着につながり、参加者への真摯な関わりは、参加者への何よりの激励となり、焦りを軽くする。

2）参加者は、傾聴姿勢に好感と安心感を抱く。参加者達は、じっと聴いてもらうことが人生には真に必要なことを知る。また、話したくなって話すようになるまで待つ姿勢は、参加者達に強い印象を与える。

3）子どもの行動をしっかりと見つめ、考え、理解しようとし、またそれを親達に問いかけ、子どもや親との関わりの中でより真実をつかもうとする理解と事実把握の姿勢は、参加者達には魅力的である。

4）具体的な how to をあまり話さないのは、初期の段階では参加者達に不満と不安を与えるが、そのうち「結局は自分自身が考える以外にないと示されている」と受け取ってもらえるようにもなる。これは来談者中心・親の自立援助に結びつく。

5）グループの流れの把握と提示、話をまとめて次の課題に進む、話の内容が新鮮なうちにポイントを解りやすく指摘し、親の長い話の中の重要なポイントを取り上げ、またメンバーの気づかないいい話を取り上げるなどして、メンバーの理解を援助できるファシリテーターとしての技量がポイントになる。参加者の継続参加には、これらの技量へのある程度の評価が必要であろう。

6）ファシリテーターの発言・助言をどれだけ取り入れていくかは、参加メンバーによって異なる。権威として受け入れ未消化のままのもの、刺激として子どものへ理解と行動を変化の契機にするもの、抵抗・反論を示すものまでの幅がある。

ファシリテーターの発言のみならず、非言語行動も含めた全行動が、参加者に影響を与える。

4．3．2．参加者の発言促進の援助

1）“聞いているだけで十分勉強になる”というメンバーに、自分が話したときの方がはるかに得られるものが大きいことを確かめるように、促進する。

2）疑問や反発を感じながら発言しない場合：疑問や意見を出しやすいような雰囲気を作る努力が必要である。特に、グループの雰囲気、流れ、子ども本人とか学校への否定的発言は、メンバーにとっては勇気が要るし、ファシリテーターにとっては傾聴が困難であり、大きな課題である。

3）他のメンバーへの質問とか助言の形のみの発言の場合には："あなたご自身のお考え（ご意見）は？"というような質問を投げかけて発言を促す。

4）話題には加わっているのに発言しないとか、発言せずに終ってしまいそうなメンバーに、発言を促す働きかけをする。ただ、これには、話さない自由の侵害、終了間際に子どもの問題の経過などの長い話になるとか、発言したメンバーも最初の発言が流されてしまう危険もある。

4．3．3．メンバー間のコミュニケーションの促進

1）発言の受け取り違い、聞き漏らしがあれば、発言者に再発言を求めて修正する。発言が特定の人に向けられている場合は、特に必要である。

2）長々と話し続けているときには、それを聞けていない他の人達のことに気付かせる。

3）前の人の発言とは無関係な発言をする人には、それを指摘し、前の人の発言を聞けておらず、自分の話したいことで頭が一杯だったことを確認する（厳しいやり方なので、グループがかなり回数を重ねてからの方がよい）。

4）ファシリテーターに向かっての話を、グループ全体に向ける。

5）隣同志の私話を、グループ全員にも分かちあうように勧める。ただその私話によって全体への発言の自信をえているような場合に注意しておきたい。

6）他者の真剣な発言に対し、"そんなことはしてみたが役に立たなかった"などと水を差す人には、具体的にどうしたかを話してもらう。きちんと実行していると初心者の無駄な努力の防止につながるし、そうでなければ以後は

水を差すような効果は失われるであろう。

また、ファシリテーターが、『今のあなたの発言は、これからやってみようという気持に水を差すことになったように、感じられますが・・・。』などと、感じたことを伝える。それは、①自分の発言が他の人にどう受けとられるかを知り、そのことを配慮しながら発言を心がけるキッカケにもなろう。②それがきっかけで、自分の人間関係のもち方、特に子どもへの接し方に目を向けられれば、大きな変化のきっかけになるであろう。

４．３．４．子どもの言動の理解の仕方の提供

親がグループのなかで話した子どもの言動について、親とは違った、より子どもの立場に立った、より子どもの成長促進につながるような、理解の仕方を提供していく。次のような子どもの言動には、特に注意を払う。

１）登校できていないことに対して罪悪感をもっていることを示す言動。

２）何とか登校しようとするその子なりの工夫・努力を示す言動。

３）自分の今後の方向、進路、将来のことを考えていることを示す言動。

４）子どもが気分を一新しようとする言動（部屋の掃除・模様替、マンガ本を部屋から一掃する、部屋替の要求、何か月振りかの入浴、散髪・・・）。何をそのように一新しようとしているのかを理解できるのが、望ましい。

５）親が忘れてしまっている幼児期、小・中学校時代のことを持ち出して、親を非難する言動。時には、これを１日何時間も、何日も続け、きちんと時間的経過通りであったことがかなりの親から報告され、子どもはそのようにして過去の心の傷を癒し、荷物を下ろし、親との関係を『生き直し』ているようである。それが現在に至って、初めてその子は現在と未来を現実的に生きていけるという、『生き直し』の世界が、親子の間で展開されているようである。

そのような理解の仕方を話すことにより、子どもにとっては極めて重要な段

階にきたのであるから、親はそのような非難に耐え、傾聴し、親というより一個の人間として、素直に、誠実に対応していくように励ます。

４．３．５．体験談の引き出し

あるメンバーから質問や疑問が出されたとき、あるいは困っていることが話されたとき、それと同じような体験をしてきた他のメンバーに、その体験を話してもらう。そして、メンバー達は、同じ問題に対しても、幾通りかの理解と対応の仕方があることを、相互に学び取る。

そのうち、メンバー達から自然にそのような話がでてくるようになる。

４．３．６．親子関係促進の援助

１）親の感情・思考の言語化と子どもへの伝達激励　参加者が、子どもや子どもとの関係について何かを話したとき、特にそれが新しい発見であるときは、『そのことをお子さんに話しましたか？』とたずね、大抵はまだのことが多いので、『ぜひ、お子さんに話してあげてほしい』という、こちらの気持ちを述べる。親達はその実行困難性を訴えたり、「それができるためには、真に自分の本心かどうかの点検が必要」とその有効化のための条件を考えたり、あるいは「親子の間にはまず言葉ありきではない」との反論がある。

２）子どもが親にポツリともらす一言の背景には、その子なりに長い間考え抜いた結論であることが多い。その結論に至るまでにいろいろ考えたことを、聴くように激励する。

「お母さん、長生きしてよ」は、「不登校－就職不可－一生無収入－親の死－餓死」という、子どもには生死に関わる不安から生まれる一言なのである。

３）子どもの積極的、自発的行動に注意を向けられるように援助する。親達の課題としてその記録と提出を義務づけることも可能である（【付録４】）。

4）子どもの行動についての、親とは別の理解の仕方を提供する。親を困惑させる行動の多くが、『愛情確認』のためかもしれない。

5）私は、「グループでの傾聴度と、家で子どもの話への傾聴度は同じである」と、機会をとらえては傾聴の激励繰り返す。それを受け入れてのグループ内と家庭での子どもへの傾聴のための反省と努力は、子どもとの会話成立をもたらす。

4．3．7．親の『気づき・学び』の位置づけ

親達は、子どもとの死ぬ思いの毎日の生活の中で、実に多くの素晴らしいことに気づき、学びとり、それを『親のグループ』で分かち合う。

そこでのファシリテーターの役割は、それらの『気づき・学び』が、どのように大事なことか、どのような意義のあることなのか、カウンセリングとか心理療法の領域でいわれているどんなことの具体例かを話す。これは、私が『来談者から学ぶ対人援助者の成長』のための１単位とした、『気づき・学び』－『既存の知識体系のなかへの位置づけ』－『自我拡大』－『援助行動での活用』（小野1993b ）の第２段階に相当するといえよう。

例えばある母親が、「△△講座で習ったことを一生懸命にしていたが、どこか気持ちの中で納得できていなかった。この間から、自分が納得できるやり方に変えたら、その方がずっと子どもとの話がスムーズにでき始めた。」という体験を語ってくれる。２人がそれと似た体験を語る。そこで私は、それがカウンセリングにとって、あるいは人との信頼的人間関係を深めるための必要な条件とされる『純粋性』とか『自己一致』の具体化といえると話す。

親達はそのような重要なことに気づけたことに自信をもち、早速にも子どもとの生活により一層の活用がなされるようになっていく。

４．３．８．情報提供

１）進級・留年・進学・転校・卒業　これらの問題に関する法的な規定ばかりではなく、自分の地域の夜間中学校、単位制高校、定時制高校、通信制高校、ＮＨＫ学園などと、それぞれの不登校児の受け入れについての方針（担当者なり責任者によって変る）についての情報を得ておき、質問が出されたり話題になったときには、情報として提供していく。また、参加メンバー自身が情報を求める行動を起こせるように激励、援助する。

２）診断書　医師の診断書を学校から要求され、本人を病院に連れていけずに困惑している親がよくある。学校が診断書を要求する意味（学校は正当な根拠に基いて休学、復学にしたという証拠書類）を知っておいて、情報として提供していく。場合によっては、代替えの方法の可否を親が学校に打診してみると、非医師が援助できることもある（臨床心理士の意見書）。

３）「これまで良くなった人がいるか？」　この質問は、情報というよりもむしろ自分の子が良くなる保証を求めているのであり、この段階の親はまだ元気になった子の親から学び取れる段階にはないようである。

４）中学校卒業資格・大学入学（高校卒業）資格取得方法（小野1985）。

４．３．９．自分もかかわっていく

グループの中で感じたこと、自分の内から生じてきたことを話し、伝える。

知りたいとか、話してほしいという気持が強いときには、たずねる。このようにすることで、自分が場面をリードし過ぎていることに気付けば、そのことを述べて退き、メンバーの動きに任せる。

ファシリテーターにとっても、グループの中で親子関係・夫婦関係・父親の問題の話によって、自分自身の在り方を問われ、考えさせられるのは珍しくはないし、またそれを少し話したくなるのも極めて自然なように思われる。

参加メンバーが母親ばかりであることが多いので、唯一の男性である私は、ときには男性代表、父親代表、夫代表としての発言を求められる。

４．３．１０．親子関係における親のモデル

私自身は意図しなかったことであったが、グループの中での私の態度が、参加メンバーにとっては家庭における親子関係のモデルになっていることが、グループの中で親達から報告されることが時々ある。最もよく出てくるのは、筆者の傾聴姿勢を子どもとの関係のなかでも見習おうとするものである。

セラピストークライエント関係における『模倣』といってよいでろう。

４．３．１１．メンバーの動揺の防波堤

子どもが精神的に不安定になると親も動揺する。親の方が先に少し不安定になると、敏感にそれを感じ取った子どもの方が大きく動揺する。

メンバーが、情緒的表現を伴って、大きく動揺していても、ファシリテイターが動揺することなく傾聴できていれば、メンバーの動揺は鎮まってくる。参加者達は、「先生が平気で聞いているんであるから、たいしたことではないのだろう」と、受け取るようである。ファシリテーターがそのような態度をとれるためには、親子の動揺の意味を理解でき、その安定化過程を知っていることが必要であろう。グループ全体が、このような役割をとれることもある。

４．３．１２．親のグループの目的、意味の確認

このようなグループの目的とか意味を、話題がそこに及んだときには、メンバーと共に確認しあう。

１）孤立感を抱き、動揺している親達が、連帯感を得て安定を見出す場。

２）傾聴の練習の場。

3）自分とは違った『ものの見方』のあることを実感できる機会。

4）これまでとは違った価値観、生き方があることを知り、それでも安全なことを知る場。

4．3．13．メンバー達の知恵の集配

参加者達が問題の子どもを抱えて必死に生きる中でつかみとった洞察、人生の知恵を、参加者達が相互に学び取るばかりではなくて、ファシリテーター自身もそれらを頂戴し、それを他の親達に配る、いわば人生の知恵の集配人の役割りがあるような気がする。

4．4．ファシリテーターの自己訓練

私達の『親のグループ』は、毎回真ん中にテープレコーダーを置いて行われる。『録音に同意すること』は、参加への条件でもある（【付録1】）。もちろんプライバシーの保護は約束する。

私は、約5年間、毎日曜日の午前中にそのテープを聞きながら　1）各メンバーごとの発言の記録をとり（【付録6】、【付録7】）、そのコピーは、各担当児童福祉司に渡す　2）自分の聴きもらし、聴き違いのチェック　3）録音を聴くことによる新しい気づきのメモをする。

2）と3）は次週の『親のグループ』で私が参加者達に話す。特に、2）について謝りながら伝えることは、私にとっては苦痛であり、その苦痛がこの項目を少なくし、ファシリテーターとしての能力向上のためのバネになったように思う。

このようなことは、今、考えてみれば、私の修業時代であった。そして、

スーパーバイザーが身近かにいない私にとっては、唯一ともいえる有効な修業方法ではなかったかと思う。また、今後、私が発展させていけないかと考えている『クライエントから学ぶ』ことによるカウンセラーの成長なり養成の方法（小野1993 b）は、この修業の中で可能性を確認できた。

5．セッション

5．1．形式上の問題

5．1．1．セッションの時間

グループが集るのは１回何時間が適当かという問題である。

私達はこれまで１セッション２時間でとおしてきた。それでなければいけないという理由もないし、また特別な不都合もない。前後のスケジュール（この節5．1．4．）からも、これでよいのではないかと考えている。

5．1．2．クローズッドかオープンか

1）クローズッド・システム　開始時のメンバーで、何セッションか（私達の場合は12）の１期が終わるまでは継続し、途中からの新しいメンバーの参加は認めない。これは主として小中学生の不登校児をもつ親で、問題が生じてからまだ日が浅く、不安が強くてセッションの間隔が１週間以上開くことには耐えにくい、変化段階（小野1993 a）の比較的初期にある親達に適している。

2）オープン・システム　参加者はどのセッションからでも参加でき、区切

りは設けず、出席も中断も自由である。これは主として高校生以上の不登校児をもち、問題が生じてから月日が経ち、比較的安定した親達に適している。

私は現在、最初個別面接をして運営方針を伝え、隔週に会を開いている。

５．１．３．何セッションが適当か

グループのメンバーを固定したクローズド・システムでは、１グループが集るのは何回が適当かという問題である。

私達の小・中学生の親のグループは、週１回、ほゞ１２回で通していた。それぞれのグループによって、短か過ぎることもあり、１０回で『あー、このグループの仕事は終ったなー』と感じられることもあり、１２回で『丁度、終ったなー』と感じられることもあった。１２回というのは、このような場合、かなり適当な長さではないかと考えている。

５．１．４．セッション前後のスケジュール

１）クローズッド・システムの場合（香川児相の例）

１３：００～１４：００	個別面接（必要なケースのみ）
１４：００～１６：００	グループ・セッション
１６：００～１７：００	担当児童福祉司達とファシリテーターとのミーティング。情報交換と今後の必要な役割り分担などの話し合い。

なお、個別面接は、かなりのケースにおいて、不可欠である。家族が当の子どもの問題以外の問題を抱えているような場合には、特に必要である。また、人前で話すことに不慣れな親とか、自分の話すことにひどく自信のない親にとっては、個別面接がグループの中での発言のリハーサルになっていることもよくみられ、それは必要なことであり、また有効である。

親と同伴通所が可能な子どもの場合には、心理判定員との個別面接がもたれるケースもある。また、『子どものグループ』実施も可能であろう。

2）オープン・システムの場合の例

（1）これは私が全県・近県からの参加者対象に開催中の例である。

10：00～12：00　セッション

この後の昼食、それに続くティータイムが、

『二次会』（後述　7．）に好都合である。

（2）これは私が自宅（郡部の農村地帯）で行い、近距離からの、昼間は出席しにくい参加者達のためのグループで、季節によって時間調節も行われる。学校単位の『親の会』もこの例が多い。

19：00～21：00　セッション

5．2．　セッションの内容

5．2．1．初回の始めかた

通常は、一般的な自己紹介から始められる。

1度だけ、初回のために日曜日を丸1日使って実施したことがある。9時から17時まで、昼食の時間も惜しんで全員が輪になって膝くっつけあって話し続けたのは、印象的であった。これはグループの凝集力を高めるうえでは、有効な方法である。事情が許せば、さらに試みてみたい方法である。

あるいは、こちらの考え方とか学習方法などの説明、いわばこの『親のグループ』の場面構成から始めることも可能である（【付録1】参照）。

５．２．２．構成化の試み

セッション過程を構成し、プログラム化できないものかと、その可能性を少し探ってはみたが、そのような努力は中断した。その理由は次項に述べる。しかし、軽いケースで、知的理解力の高い親達を集めて試みる場合には、１つの有効な方法になりうる可能性も捨て切れない。

５．２．３．フリー・トーキングに徹する

現在、私達は全セッションをフリー・トーキングで通している。その一般的な意義に加えて、次のような理由からである。

１）各メンバーの独自の成長速度の尊重：私がどう願おうと、各メンバーは、子供の問題への理解、親子関係の理解と改善、自己洞察などにおいて、その人なりの成長の速度とパターンをもっている（小野1993 a）。私にはそれを尊重していく以外の道はない。その方が、それを無視した画一的なこちらのペースで進めるよりも、最終的には援助的であると考えざるをえない。

２）参加メンバーにとっての各セッションの意味：不登校状態にあるわが子との毎日の生活の苦しみに耐え続けることは、ある期間は、多くの親達にとって、極めて困難なものである。そこで、参加者達は、『親のグループ』の中で、一週間の経過報告の形をとることが多いが、その生活の整理をし、重荷を下さなければいけない。そして次に、他の参加者達の話を聞きながら、それを刺激として、次の１週間の生活の支えなり目標をつかみとっていく。このような作業は、フリー・トーキングのなかでなければできない。

６．『親のグループ』の援助要因

６．１．援 助 要 因

これまでに援助経験を重ねながら、私にとって徐々に明らかになってきた『親のグループ』における１３の援助要因を挙げておきたい（Yalom1975、Bloch & Crouch 1985, 小野1985･1987a･1994 ）。

先ず、参加者達の心理的安定に貢献する６つの援助要因を挙げてみたい。

６．１．１．孤立的不幸感からの解放

子供の不登校で、世の不幸を一身に背負い込んだような絶望感から、多くの参加者達が何度か親子心中を考えているような、孤立的不幸感から参加者達を解放する要因である。

『親のグループ』への参加によって他の親達と顔を合わせ、直接苦悩を聞くことによって、初めて「自分だけではない！」と実感でき、不幸感の軽減、消滅につながり、それは直ちに親達の精神的安定につながる。その安定は、直ちに他のメンバーの態度を見習って前向きに歩み始める力となる。

専門家の援助がない、学校単位の『親の会』（小野1992）、各地の『不登校を考える会』などでも、親が２人以上集まればこの援助要因は働き始める。

６．１．２．自由で安全な雰囲気

最初はファシリテーターによって、そのうち全参加者によってかもしだされるグループの雰囲気のひとつであり、その中で参加者達に様々な模索を可能にする要因である。

参加者達の感じとるのは、①参加の自由、②発言しない自由、③発言強制からの自由、④話す内容の自由、⑤話すことの脅威からの自由と安全感である。

参加者達は、メンバーの同質性への近親感からこの自由を感じられ、大きな心理的安定を得る。

これらの自由な雰囲気の中での自己開示は、現実的自己評価とか自己決定の効果をもたらし、また、後輩参加者達に希望を与えていく。さらに、「開き直りの自由さと身体に湧く力を感じる」と、エネルギーすらも生む。

６．１．３．受容

傾聴と尊重を中心とした情緒的支持を参加者達に与える要因である。

多くの外傷体験を積み重ねてきた親達は、『同じ悩みをもつ仲間』のなかで受容されるという全く別世界を体験でき、自己開示やカタルシスにつながる。

被受容体験は、①「気分よく話せ、気分よく聴けるのが『親の会』での真剣勝負」といわれる被傾聴体験、②自分の問題を共に大切に考えてくれ、そこには愛情すらも感じ取られる被尊重体験、③相互受容体験（先ず親子間、次いで参加者間）である。

参加者は、被受容体験を、「全ての人から受け容れてもらえるというのは凄い」「安心もでき、心から救われるような気持ちになる」と評価する。

この被受容体験が、親達が子供を受容できるようにする、という変化を生む。しかし、このつながりは親達には見えにくい。

この要因が働くにも、ファシリテーターのメンバーへの傾聴と尊重の姿勢に参加者達が印象づけられ、メンバー相互間、親子間にも波及するというように、見本としてのファシリテーターの役割が大きい。

６．１．４．共感と理解

肯定的な情緒を伴う全参加メンバー間の正確なコミュニケーションであり、『不登校児をもつ』というメンバーの同質性により増大される要因である。

唯一の理解してもらえる場としての『親のグループ』の認知が、参加初期によくみられる。子供の将来の不安、養育者としての責任を追求・非難される辛さ、養育失敗という自責感、他の家族の協力の得られない孤立感などは、他では到底理解してはもらえない。このグループに来てやっと理解してもらえると感じられるのである。

次に、参加者が共感と理解を求めるのは、常識的には理解し難い子供の言動への、子供の立場に立った理解である。

この要因が働くには、先述の被傾聴体験と、『同じ悩みをもつ人達』というメンバーの同質性が重要である。

この共感と理解には、①メンバーの話や気持ちが正確に受け取られる、質問にきちんと応えが返される、②他のメンバーの話や気持ちを正確に受け取り理解する、③メンバー相互間で共感と理解ができる、④メンバーが自分の子供の気持ちを理解する上で他のメンバーと同感できる、という４つの面があり、実際的にはこの順に重要である。

不登校は常識的には極めて理解されにくいだけに、『親のグループ』におけるこの要因は極めて援助的な意味が大きい。共感と理解が得られると、①他では理解されないことでも安心して心から話ができ、②心理的に安定できる。

ここでも重要なのは、共感され理解されると、単に心理的安定をもたらすには止まらず、直ちに子供への援助的行動を生むことである。

この要因の有効化には、参加者達の共有体験による理解に止まらず、ファシリテーターの多くの実例体験に基づく理解の提供が要求される。

６．１．５．カタルシス

参加メンバーの閉じ込められている情緒に風穴を開ける要因である。

『ここでは泣いてもいい』という場面感知からこの援助要因が働き始め、他のメンバーの発言に、これまでの自分を振り返って涙するのも珍しくない。

参加者達は、後ろ指さされる日常生活の中で、人に接する機会は最小限に閉ざされており、時には「話したくてたまらない」とか「身も心も落ち込んでいる」ので、カタルシスが必要なのである。そして参加者達は、「家族以外には絶対話せない、そんな苦しい状態を隠すことなく、全て話せる」のである。

夫・教師への攻撃的感情の表出と反復、ときには責任転嫁感情の十分な表出は、内省化の前提段階である（小野1993 a）。

カタルシスの援助的効果は、すっきり効果に止まらず、「話しながら悩みが納まっていく」のは１つの解決であり、「大変救われたように思う」のはその効果のより深化であり、「自分に課せられたことをひとつクリアーできたような気持ち」のときには成就感がある。さらには「何よりの活力剤」となり、「心の底から泣ける事によって空っぽになり、家に帰って息子の悩んでいる行動、暴力など、何でも受け入れられる」と、受容力を高める効果も生まれる。

６．１．６．将来の展望ー希望

絶望のどん底に追い込まれてきた参加者達が、将来の展望と希望をもてる要因である。

親自身と子供の変化・成長への希望という２つの面の希望が生じるには、先ず、親達の心理的安定と『本当に変われるんだ』と思える親自身についての希望が必要である。子供については、願望から、未来への明るい展望がもて、希望が湧いてくるが、自分より先に歩む他の親の話を聞いて、自分がどのようにすれば自分の子がどのメンバーの子どものようになれるかという方法論までも

学び、見通しが得られ、希望が開けてくる。

この要因の有効化には、他の参加者達の子どもの変化の見聞、先輩メンバーの『経験談』と勇気ある率直な自己開示が役に立つ。またファシリテーターが提供する多数の豊富な経験と資料、実例なども、親達の将来を明るくできる。

以上の心理的安定のための６要因は、親達の心理的安定に止まらず、即より積極的な行動への大きなエネルギーを育み、変化へと動かす。

次に、安定から変化へと繋いでいく３要因を見ていきたい。

６．１．７．対人関係の学習

この要因は、参加者達がグループ内の人間関係の中から、親子関係に有効なものを学びとる可能性である。

先ず、ファシリテーターと自分や他のメンバーとの関係が、自分にとってどのような意味があるかの理解から、参加者達は自分と子どもとの関係の見本としてその在り方を学習する。ファシリテーターの非指示性、傾聴的態度が、これまでの自分になかったものとして学習されることが多い。

また、メンバー間の関係からの学習の面では、「傷つけている」ことがまず見えてくるが、積極的な面はなかなかみえない。

この学習はそれほど容易ではないが、参加者と子ども本人との関係、他の子どもとの関係、他の家族との関係、職場の人間関係などへと拡大していく。

この援助要因の有効化には、ファシリテーターは、自分が提供する参加者達との関係が親子関係の見本になるという事実を受け入れ、権威の座から降りることへのより一層の努力が必要であろう。

６．１．８．他のメンバーを通しての自己理解

この要因は、他のメンバーの姿の中に自分の姿を見ての自己客観視と新しい自己理解を可能にする。

しかし、多くの参加者達が自分の子どもと他のメンバーの子どもとの様々な違いを挙げて、この要因の働くことに、参加中止も含めた様々な抵抗を示すことが多い。そのうち自分達親子と他の親子との共通点に気づき始め、そこからこの要因が働く。

この要因が働くのは、①他のメンバーと自分との類似性を見て自分を客観化し、自分と子どもへの理解が進む、②他のメンバー間の関係の中に自分の親子関係をみて、それをお手本とも反面教師ともする、③他のメンバーの姿を通して自分の過去あるいは現在の対応策の自己評価ができ、肯定的な自己評価が生じる、④他のメンバーの目を通して自分の変化と成長を確認する、となる。

継続参加者達は、新しい参加者達の姿のなかに過去の自分の姿を見て自分の変化と成長の軌跡を知り、次の変化と成長の可能性を確信できる。同時に、新しいメンバーへの思いやりを示すことができる。

この要因の意義は、参加者達が自分と子どもの理解のための具体的方法を手に入れ、他のメンバーの経過から今後の変化の予測も可能になることである。

６．１．９．他のメンバーの洞察などからの学習

参加者達が、親子関係を中心とする生活経験のなかで学習し、洞察したことを報告し合う中から、自分に有用なものを学び取れる可能性を見出し、参加者達は、それに強い衝撃を受けながら受入れ、学習していく。

他の場所で生じた体験談の傾聴とグループの中の眼前に生じる体験の観察によるこの学習は、①『見本としての他のメンバー』が見えて来ることによる自省から、子どもへの姿勢、親の生き方から多くを学び、勇気と活力を得る、②

思考の整理・明確化・修正・拡大・深化への刺激を受ける、③自分の対応の反省と確認、子どもへの共感度の再検討、④非言語的表現の世界を知る、おろそかにしていた大事なものがひとつずつ返される、自分自身を許せないと他の受け入れは難しい、自分が気づかなかったことで子どもを苦しめているなど、メンバー自身の気づき、自己洞察、⑤努力の有効性確信である。

同時に、問題解消と成長のためには時間の必要性も学ぶ。

この援助要因も、安定化と鼓舞効果を現す。

次は、変化のための３要因である。

６．１．１０．理解の変化への刺激

参加メンバーの、子どもとその問題についての認知と理解の仕方の変化を促す、グループ内に生じる様々な刺激である。

親達は、学歴願望とその放棄の間で揺れ、変わろうとしても変われない自分に苦しんでいる。これは『親のグループ』への継続参加の必要性を示すともいえる。やがてこのような刺激の受け容れ、「手探り状態から抜け出せた解放感」を味わい、「素直に受け容れられる」ようになる。そのための、「他の親から事実を聞く」という条件も明らかにされる。被傾聴体験も、刺激受け容れのために重要な意味をもってくる。

親が刺激を受け、変化するのは、１）親子関係　①初めて子どもの感受性の鋭さを知る　②子どもの立場に立つ理解ができる、③子どもを人間としての尊重する児童観への変化と期待する子ども像の変化　２）親の学歴指向緩和　①相当無理をした、受け売りの自分への言い聞かせ、②『登校義務感』の希薄化とそれによる心理的安定、③学習成績最優先の変化、④主体的養育方針回復　３）価値観の転換　思考が柔軟化し、『子どもの立場で考え行動する』という

行動基準を見出す　4）子どもの問題の積極的受容　5）問題解決までの長期化覚悟　①変化への確信が生じ、②子どもへの期待の変化と長期化受容が重なる、③期待する子ども像のより一層柔軟化　6）これらの刺激から激励とエネルギーの獲得、である。

この要因は、次の『行動変化への刺激』要因と併せて、「子どもの問題解決のために集まった『親のグループ』」に特有のもののようである。

6．1．11．行動の変化への刺激

この要因は、参加者達の行動に変化を生じさせるような、メンバーとファシリテーターの行動やグループの雰囲気を含む全ての刺激である。

そのような刺激には、1）助言の受け入れ、2）助言受容による子どもの不登校問題への対応変換－即行性と不安克服には注目が必要である、3）他のメンバーの体験談の取り入れ－全般的な刺激から、特に子どもへの信頼、子どもの立場に立つことの即行性が目立つ、4）参加者達の真剣な姿勢によって変化への意欲が鼓舞・支持され、変化の相互刺激になる、5）親達は学習会出席による様々な変化を語れる（小野1993a）　①親の変化－学校執着からの解放努力から自然な姿へ、行動力の獲得、親の自己統制力の増進、②親子関係の変化－待つ姿勢、子どもが学校で感じる疲労感、孤独感、挫折感、焦燥感などの心の痛み等への共感の獲得、親子のコミュニケーションの方法の工夫、親子の自立を養育の目標とし始め、それらの結果の親子関係の改善、③教師への態度の変化－学校信仰から子どもの味方への転換、④親の変化の波及－子どもの変化を引き起こす、逆に子どもの変化に親の方が刺激を受ける、⑤親の変化努力と家庭内波及、⑥対人評価と交際相手の変化、である。

この要因の存在は、むしろその効果としての親の変化から知ることになる。参加者達にとっては、このような変化の意識化と表現は相当困難である。

６．１．１２．価値観の転換の見本

参加者達が主に先輩メンバーのなかに見出すもので、自分の望む価値観への転換の見本である。これは最も新しく見出されたもので、前述の援助要因10.と11.が効果的に働くためには、この要因が促進的役割を果す。

親達の変化は、価値観の転換において最も困難であり、その知的理解の水準の変化から、行動的水準の変化が次に困難である。いわば、『価値観と生きる姿勢の変換』の困難であり、それはだれにとってもこの上なく危険なことであり、余程の勇気が要る。

その変換ができるためには、①強い心理的支持、②代替の価値観、それに加えてその安全性の見本が提示されなければ、親達は安心はできない。ところが、私達のグループ・メンバー達の中にはそうした転換の生きた見本がある。そうした転換が安全なものであるばかりか、むしろ子どもにとっても極めて有効であることを証してくれているのである（小野1993 a）。

このような援助要因がグループに備わり、有効に働くためには、『親のグループ』が相当年数継続され、しかも行動的変化段階以上に達している継続参加メンバー（達）がいることが条件といってよさそうである。その段階以下の参加メンバーのみのグループでは、この援助要因は働きにくい。

したがって、この援助要因が働くためには、主要なメンバーが継続参加する同一のグループが、相当長期間継続されることが必要となってくる。

６．１．１３．情報・ガイダンス

この要因は、ファシリテーターと他のグループ参加者達によって提供される、不登校に関する『情報』と『ガイダンス』である。

参加者達は、孤立していたのでは得られない必要な様々な情報を、求めさえすれば他の参加者達とファシリテーターから提供される。

その情報は、１）子どもの問題に関する情報、他校の対応、専門機関、行政等についての幅広い情報、特に他校の対応についての情報は学校との交渉上親達には貴重である、２）交遊への子ども達の願い、子どもの外出への親の願いに応える情報、ただこれは期待通りにはうまくは行きにくい、３）様々な他の研修機会の情報、４）参考書の提示、である。

これらの情報自体は、極めて些細なことではあっても、メンバーによって、またその時期によって、極めて有効である。さらには、これらの情報提供が、ガイダンスの意味をもってくる。

先にファシリテーターの役割として挙げた情報提供が、他のメンバーの経験によってなされることも多い。

この要因は、『親のグループ』発足当初において重要であり、また学年替り前後においても重要である。また、この要因の重要性は、グループによって相当な差異がある。すなわち、問題が始まってからの月日が浅いメンバーが多い、小中学生の親のみのグループや中学校単位の親のグループ、“早期の学校復帰”がグループの中心志向となっているグループ、そしておそらくファシリテーターなりカウンセラーの経験の浅いグループでは、この要因のウエイトが高い傾向がある。

６．２．マイナス要因

６．２．１．参加初期の劣等感

参加初期の劣等感から、参加者達は自己防衛的になり、参加継続が心理的に負担になる。これに対しては、参加者達が「だれでもそのような時期がある」ことを感じ取れるまで待つか、そのつど何かそう感じ取れるような働きかけを

するかの選択がある（援助要因『普遍化』の活用）。

６．２．２．自己への直面からの逃避

見えてきた自己の問題への直面からの逃避も見られ、このような逃避としてグループ参加中断者は少なくないようである。

参加再開へのドアー開放なりフォローアップが必要となろう。

また、子どもとの関係で、親の参加が子どもに負担と感じたり、母子分離不安の問題、自分の出席したくない気持ちの子どもへの『投影』も伺える。親が「自分のため」として、どれだけ自分自身と子どもに納得させられるかが課題であろう。

６．２．３．子どもの変化遅延による親の不安の高まり

親の期待に沿わない子どもの変化の遅延は、親の参加意欲を減退させる。しかし、この不安は、「自分が変わらなければ、子どもも変わらないということが解らなかったときでした」という形で解決可能である。

６．２．４．他のメンバーから学べない

他のメンバーから学ぶことの困難さの故に、そこに至らないままにグループを去る人達がいる。

この問題への対応の一方法として、あるメンバーにとっての他からの学習が生じたその場で、ファシリテーターがそれを確実にグループ・メンバーに明確化し、提示することが、このマイナス要因の防止に役立つのではなかろうか。

６．２．５．『グループ』運営上の問題

１）雰囲気の問題、２）反応と理解力などのコミュニケーションの問題、

3）非受容体験　これは疎外感にもなるし、反面教師としての学習の機会にもなりうる、4）相互外傷　相手を傷つけ、自分が傷つき、あるいは他の参加者達のそのような関係の観察は、親子関係のための学習の源泉にもできる。

しかし、このなかにもメンバー間の相互援助の確かな芽も息づいてはいるのである。

ここでは、コミュニケーションの媒介者としてのファシリテーターの技量向上、介入のタイミングという課題を与えてくれる。

6．2．6．子どものプライバシー侵害への罪悪感

グループにおける自分の発言が子どものプライバシーを侵して傷つけているという罪悪感が語られ、それを避けるための県外からの参加者もいる。

これには、『子どものプライバシーの問題への配慮』を提案すべきファシリテーターの責任がある。また、このような開示は結局は母親が多くを学んで変化できるきっかけとなり、それによって子どもが楽になれるというメカニズムが理解できれば、参加者達の罪悪感も減少するのではなかろうか。

6．2．7．先輩メンバー達の経験年数

希望と明るい展望を与えてくれる先輩の参加者達が、そこに至るまでに必要とした1年～3年、ときには5年、10年という『時間の長さ』が、子どもを登校させる即効法を期待して、“一寸だけ、『親のグループ』を覗いて見る”親達にとっては、その“時間の長さ”を聞くだけで恐怖に囚われ、次からは参加できなくなる。

このような場合には、再参加のための門戸を広くしておくか、参加を働きかけ続けるかの選択があろう。

このうち2．7．は、先に中断の問題としても触れた。

これらのマイナス要因には、主として参加者の内部での解消の必要な１．～４．と、ファシリテーターの課題である５．，ほとんど不可避的な問題の６．と７．に分類できよう。これらの解消なりプラスへの転化は、主にファシリテーターの責任といわなければならないが、全てのマイナス要因をなくすことは目標とされてはいても、達成不可能であることも知っておく必要があろう。

７．『二次会』の意義

７．１．『二次会』

ここで『二次会』というのは、『親のグループ』終了後、参加者達の昼食会や喫茶店での話、長時間の立ち話などを称し、「８～１０人位が、同じ喫茶店に入って、１、１、１、２、２、２というように、各人が思い思いに話し、話が交錯したり平行したり、また「先輩に相談した」というような形をとる。それは、メンバー達にとっては「大変有意義な時」となる。

７．２．『二次会』の特徴

非時間制限、気楽さ、個別的接触－より詳細な情報と個別的人間関係の保持に貢献、などの特徴をもつ。

７．３．『二次会』の意義

私は、『二次会』はエンカウンター・グループにおける休憩時間、夜の時間などと同じ意味をもち、『親のグループ』を補うばかりか、ときにはそれ以上の意味をもってくると考えるようになった。

また、この『二次会』は、一種の『リーダーレス・グループ』であり、日常的『セルフヘルプ・グループ』としても機能するように発展する。即ち、参加者達に生じる日常的、緊急的小問題は、メンバー間で連絡をとり相談しあって解決され、そこで解決されない場合にのみファシリテーターに持ち込まれる。

その結果、『親のグループ』開始以前によくみられた、時間を問わない電話とか突然の来訪は全く姿を消した。それはファシリテーターが多くのケースを引き受けている割りには、そして多くの同業者達が推測して『親のグループ』開始を躊躇させるような“大変さ”を感じなくてすむことになる。

さらに、グループの補足的意味－グループで話し足りなかった部分、聞き足りなかった部分の補足、グループの評価－ファシリテーターの発言への疑問と分析も、ここで行われる。

これらのことから、この『二次会』は『親のグループ』の延長ともいえる重要な意義をもつといえよう。

あ　と　が　き

この資料は、拙著『親と教師が助ける不登校児の成長』（小野　1985）と前後して発行するのが、より多くの人々のニーズに同時に応えられると考えていたが、予定より２年以上も遅れてしまった。その意味では、これを必要としている人々に届けられるのが遅くなったことを、お詫びしなければならない。

また、まだまだ不十分であるし、不完全なものをお届けすることに、私自身のなかに抵抗感があるが、それは今後の課題としておきたい。

今、現在のわが国の社会的ニーズに少しでも応えようとすることの方を、今の私は選択したい。

今回、６年目の全面的増補によって多少の改善はできたとは思うが、まだ改善の余地は大きい。

また、『この親に焦点を当てる方法で、不登校児はよくなるのか？』という疑問にも、この冊子では答えられてはいない。この疑問を、『この方法による援助で、親と不登校児はどう変化・成長するか？』と置き換えて、他の所で（小野1985，1986，1987a，1992，1993a）、また、６．援助要因の項の増補によって、「『親のグループ』で親はなぜ変わるのか？」には、若干ではあるが答えられたのではなかろうか。

なお、このような『親のグループ』についてのレポートや資料、情報の交換、また関連の文献の御紹介も、是非よろしくお願いしたい。

文　　献

Bloch S.& Crouch E. 1985 Terapeutic Factors in Group Psychothrapy. Oxford Medixal Publications.

林　政子　1987　非行児の親への援助　小野修編著　子どもの非行に気づいたら　ー親と教師が助ける年少非行児の成長ー　第７章　黎明書房.

Korchin S. J. 1976 Modern Clinical Psychology.（村瀬孝雄監訳現代臨床心理学　p.122-126　弘文堂　1980）.

村上昭史　1992　不登校児の父親グループについてーその意義と運営及びファシリテーションの課題　日本心理臨床学会第11回大会発表論文集　280-281

村山正治　1977　エンカウンター・グループ　福村出版.

村山正治他編　1991　エンカウンター・グループから学ぶ　九州大学出版会.

小野　修　1964　『一時保護による問題児の治療（１）ー治療的要因についての仮説ー』　児童のケースワーク事例集（第16集）　195-209　厚生省児童家庭局監修.

小野　修　1971　『自分がよみがえったーエンカウンター・グループへの参加経験』　人間関係研究会資料　No.2.

小野　修　1972　『非社会性幼児の治療キャンプ』　児童精神医学とその近接領域　13(5) 323-331 .

小野　修　1985　『親と教師が助ける登校拒否児の成長』　黎明書房.

小野　修　1986　登校拒否児の治療ーとくに児童の変化過程を中心にー　心理臨床学研究 4(1) 3-14.

小野　修　1987a　不登校児の治療ー親のグループ・セラピイによる治療経験よりえたものー　人間性心理学研究　4, 65-71.

小野　修　1992　不登校児から学ぶー子ども・親・教師の成長のみちすじ　黎明書房.

小野　修　1993a　不登校児の親の変化過程仮説　心理臨床学研究 10(3) 17-12.

小野　修　1993b　来談者から学ぶ対人援助者の成長　人間性心理学研究　11(1)　83-95.

小野　修　1994　不登校児をもつ親のグループの援助要因仮説　未公刊.

Slavson S. R. 1958 Child-Centered Group Guidance of Parents. Inter-national Univ. Press.

Yalom I. D. 1975 The theory and and practice of psychoterapy. Basic Books.

【付録１】

香川県児童相談所　　第　　期

登校拒否児の親の学習会の御案内

１．目　　的　『学校ぎらい』の子の理解を深め、親としてどうしたらよいかをお互いに学びあう機会を提供し、問題解決のためにより効果のある行動のとれるおやになろうとする努力を援助しようとこころみます。

２．参加費　　無料

３．期　　間　昭和　　年　　月　　日　～　昭和　　年　　月　　日

（毎週火曜日　１２回）

４．時　　間　１）１３時　～　１４時　担当者との個別面接

２）１４時　～　１６時　グループ学習

３）１６時　～　１７時　児相担当者会

５．場　　所　児童相談所　３階　カウンセリング・ルーム

６．参加者　　１）登校拒否児（小中学生）をもつ親　　約　１０組

２）児童相談所　担当職員　２名

７．学習方法

１）主体性の尊重：参加者の主体性をできるだけ尊重するよう努力します。そのなかで『教えてもらう』努力から『学びとる』姿勢への転換をねがっております。（【付録２】）

２）話し合い：自由な話話し合いし合いのなかで、気づいたり、工夫したり、努力していることをお互いに学びあう。

３）『学校ぎらい』の理解：お子さんの様子を今までとは違った目で見た

り、他の参加者のお子さんの様子を聞いたり、資料などを読んで、学校ぎらいの子の心の動き、行動、元気をとりもどしていく段階などについての理解を深めていく。

4）親子関係の改善：親子関係の幾つかの面をよく気をつけてみたり、それを変えていく計画をたてたり、その結果を自分で評価したり、親子関係をよくしていく方法の学習を試みます。

5）親自身の心の解放：の学習会のためにも、お子さんと心を通じ合うためにも、親自身が心を開くことが出発点のように思えてきました。そのためにも勇気ある試みをしてみませんか。

8．参加申し込みの時にご了解しておいて頂きたいこと

1）全回出席：最愛のお子様のために、万難を排して１２回続けてご出席ください。

2）両親での出席：ご両親で出席される方が、より効果があります。

3）時間の厳守：学習会への遅刻・早退は、自分にとっても、他の参加者にとっても、学習の妨げになりますので、極力避けてください。

4）録音について：グループ学習の全ての内容の録音をさせて頂きます。（１）より効果のある学習方法、その他学校ぎらいの問題解決のより有効な方法を探究していくためです。（２）テープは（１）の目的以外には使いません。個人の秘密は守ります。

5）秘密を厳守：参加者の皆さんは、グループ学習中に聞いた他の人の発言のうち、個人の秘密は固く守る義務があります。

6）担当者への協力：毎回の学習会後のアンケート、毎週の記録などで、担当者にご協力ください。

㊟上記各項目をご了解のうえ、参加申し込みをしてください。

【付録２】

香川県児童相談所　第　　期

登校拒否児の親の学習会参加申込書

香川県児童相談所長殿

住所　〒＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☎＿＿＿＿＿　（　　）　＿＿＿＿＿

氏名　　父親

母親

（それぞれにご自身で署名してください。）

参加期日　第　　期　　自　平成　　年　　月　　日

至　平成　　年　　月　　日

私達は、『香川県児童相談所第＿＿期登校拒否児の親の学習会御案内』の内容を了解し、参加を申し込みます。

平成　　年　　月　　日

㊟１．現在は、ケース担当の児童福祉司による確認で、この申し込みに替えている。（参加は、児童福祉司担当ケースのみで、この学習会のみの参加は認めない。）

㊟２．参加者の参加意識を明確にするには、役にたつ様式ではないかと思う。

【付録３】

お子さんの様子

１．氏名＿＿＿＿＿＿＿＿（昭和　　年　　月　　日生）

２．学校＿＿＿＿＿＿＿小・中学校　　年　　組　　担任

３．現在の状態

Ａ．長欠状態
（昭和　年　月　日から）

Ｂ．たまに登校。ほとんど登校していない。

Ｃ．登校したりしなかったり。

Ｄ．時々休む。

Ｅ．休まないが、登校をしぶる。

４．現在の家庭での状態

Ａ．暴れたり、家族に暴力をふるう。

Ｂ．何もしないで、ブラブラしたり、テレビをみてすごす。

Ｃ．手伝いをしたり、趣味的なことはする（　　）。

Ｄ．少しは勉強もする。

Ｅ．登校準備はする。

Ｆ．外出　ａ．自由にする。ｂ．休みの日や夜だけ。ｃ．全くしない。

５．お子さんが口にする登校しない理由

Ａ．病気や体の不調を訴える。

Ｂ．学校、友達、先生のこと。

Ｃ．物を買ってくれないこと。

Ｄ．その他（　　）。

㊟１．『親のグループ』のために参加者を新しく募るような場合、児童の状況把握のために用いる。

【付録４】

一　週　間　の　生　活

児童氏名（　　）　　第（　　）回

月日	曜	起床時間	登校	授　業	自発的積極的行動（親が書く欄）	すすんでしたこと、児相の先生に伝えたいこと（子どもが）
	火		可否	123456		
	水		可否	123456		
	木		可否	123456		
	金		可否	123456		
	土		可否	123456		
	日		可否	123456		
	月		可否	123456		
	火		可否	123456		

㊟１．この表は、Ｂ４横の用紙を用いる。

㊟２．この表は、親が子供の積極的な面に目を向けられるようになることを狙ったもので、一種の“課題を課す”ものである。記入したり、提出するのに抵抗のあるメンバーには、無理をしない方がよい。

㊟３．この表に記入されたことから、個別面接で話題が発展したり、狙いどおりの効果を生む場合もある。

【付録５】

今日の学習会をふりかえって

第　期　第　回　平成　年　月　日

あなたのお名前を書く必要はありません。素直に、正直にお書きください。それがあなたに、私達にも、最も役にたつのです。１．～３．は、１～５の数字を○でかこむ。

１．今日の学習会はどうでしたか？

1	2	3	4	5
全々よくなかった		少しはよかった		非常によかった

２．今日の学習会に、あなたは自分がどれだけ参加できたと感じますか？

1	2	3	4	5
全く参加できなかった				非常によく参加できた

３．今日の学習会は、あなたがお子さんが元気なるのを助けるのにどれだけ役にたつと感じますか？

1	2	3	4	5
全く役にたたない		少しは役にたつ		非常に役にたつ

４．今日の学習会で、最もよかったのはどんなことですか？

５．今日の学習会で、最もよくなかったのはどんなことですか？

㊟１．この評価表は、セッション終了直後に配布して記入してもらう。

㊟２．この評価のまとめの表は、次のセッション後にメンバー達に配布される。

【付録６】

第　　期　　『登校拒否児の親の学習会』　　記録票　1

児童		第　回	平成　年　月　日	出席者	父・母	FA		CoFA		記録	

Ⅰ 不安・混乱	1	不安・困惑
	2	問題の経過
	3	生育歴
	4	本人の状態
	5	原因不明
	6	親の精神的疲労
Ⅱ 責任回避	1	学校非難・要求
	2	他の家族非難
	3	親の責任回避
	4	本人の責任追求
Ⅲ 模索	1	本人の否定面
	2	依存的な要求・質問
	3	無根拠登校期待
	4	過保護的な思考
	5	分離・先取り　不安
	6	助言への抵抗
	7	操作・強制・おどし
	8	学習へのこだわり
	9	諦め・挫折感
	10	その他
Ⅳ 解決方向探索	1	本人の積極面
	2	本人への理解
	3	親の弱さ
	4	親の反省
	5	親の非言語行動効果
	6	本人の変化に気付く
	7	本人から学ぶ
	8	他の人の積極面
	9	長期化の覚悟
	10	周囲の人に左右さる
Ⅴ 方法探索	1	改善・治療方法
	2	親の態度の変更
	3	交友
Ⅵ 変化	1	親の自己洞察
	2	親自身の変化
	3	親の本人の連鎖変化
	4	親自身の課題
	5	学習会による変化
Ⅶ	1	問題の積極的受容
Ⅷ 親の成長	1	自己の問題解決
	2	夫婦関係の改善
	3	その他

㊟1．セッション中のメンバーの発言を、左の欄の各項目の右の空欄に記入していく。

㊟2．それによって、各メンバーがⅠ～Ⅷのいずれの変化段階にあるかの評定ができる。

㊟3．『本人の状態』の評定については、文献欄小野１９８６を参照してください。

㊟4．Ⅰ～Ⅷの『親の変化段階』については、文献欄小野１９９３ａを参照してください

本人の状態					
1．苦悶期	3．始動期	5．準備期	7．不安定登校期	9．児相保護	
2．休息期	4．帰心期	6．挑戦期	8．安定登校期		

【付録７】

第　期　『不登校児の親の学習会』　記録表２

記録者＿＿＿＿

児童			第　回	年月日	出席	父母	FA		CoFA	
Ⅰ参加度	1	傍　観　的								
	2	心理的参加								
	3	行動的参加								
	4	十分メンバ								
Ⅱ発言量	1	沈黙がち								
	2	質問程度								
	3	躊躇発言								
	4	自由な発言								
Ⅲ関係	1	孤立無関係								
	2	Ｆとの関係								
	3	自由な発言								
	4	傾聴・反応								
	5	交流・配慮								

㊟　この表は、参加メンバーのグループの中での行動を把握するためのものです。

人間関係研究会について

人間関係研究会は，エンカウンター・グループを中心とした人間関係の改善と促進の方法についての研究と実践を目的として，1970年春に発足しました。この研究会は，人間関係の分野に関心をもつ研究者と実践家が閉鎖性をうち破り，新しい人間関係をもとに組織と集団や個人生活のあり方に，より真実で創造的・建設的なものを求めることを課題としています。人間関係こそは，私たち人間の生き続ける限り，世界・国家・社会を通じての大きな課題であり，障壁・闘争・破滅につながると同時に，成長・建設・福祉への道でもあります。この新しい分野に関心をもたれる方々が，この研究会を利用し，経験と知識を交換しあうことを希望しています。

この研究会は，年間二十数回のワークショップやセミナーを開催し，文献資料の配布および機関誌“ENCOUNTER”の発行も行っています。

人間関係研究会刊行資料

人間関係研究会では，グループ活動に関連する資料を刊行しています。自分のグループ体験を掘りさげて見つめるためにも，一読をお勧めします。また，“こんなことに関する資料がほしい”という様な御希望もお知らせいただけると幸いです。

No. 1　畠瀬　稔：身体接触を伴う人間関係の促進の一技法（改訂増補），1972
（価 200円　〒 130円…… 40 g）

No. 2　小野　修：自分がよみがえった ── エンカウンター・グループへの参加経験 ──，1971
（価 200円　〒 130円…… 40 g）

No. 3　ロジャーズ，1967（小野　修訳）：学校組織の主体的変革のための計画，1971
（価 200円　〒 130円…… 45 g）

No. 4　畠瀬　稔：エンカウンター・グループについて ── 来談者中心療法の行動科学的発展 ──
（「教育の医学」18巻1号より転載）　（価 200円　〒 130円…… 30 g）

No. 5　ジェンドリン&ビービー，1968（小野　修訳）：体験グループ ── グループのためのインストラクション（増補改題）──，1972　（価 200円　〒 130円…… 40 g）

No. 6　北島　丕：高校生のためのグループ・カウンセリング，1976
（価 800円　〒 270円……180 g）

No. 7　増田 實，東山紘久，清水信介：ラ・ホイヤ・プログラムへの参加経験，1977
（価 200円　〒 130円…… 40 g）

No. 8　畠瀬　稔：企業における人間関係の改善について ── エンカウンター・グループの導入 ──
（価 200円　〒 130円…… 30 g）

No. 9　渡辺　忠：職場のチーム・ビルディング ── 人間中心の組織づくりのために ──，1985
（価 300円　〒 190円…… 60 g）

No.10　ナタリー・ロジャース（坂川雅子訳）：母と私 ── 鏡の中を覗いて ──『生まれ変わる女』より
（価 200円　〒 130円…… 35 g）

No.11　小野　修：子どもと共に成長する親たちのグループ ── 援助者のためのマニュアル ──
（改訂増補）1994　（価 500円　〒 270円……115 g）

No.12　小柳　晴生：エンカウンター・グループ多数回参加者としての自己分析
（価 300円　〒 190円…… 75 g）

機関誌　ENCOUNTER　出会いの広場　年2回発行　（年間講読料　1,500円）

◎機関誌 ENCOUNTERの申込先…… ENCOUNTER編集事務局
〒761-01 高松市屋島中町 383-3-507　小柳方　TEL 0878-43-6444（夜9時まで）へ
ご送金は，郵便振替　徳島 8-36521 まで

※ 〒印は1部当りの郵送料です。資料価格と一緒に現金書留でご送金下さい。

上記の資料の申込み先　〒206 東京都稲城市坂浜 238
駒沢女子大学人文学部
林　もも子
TEL 0423-50-7126（10:00 ～ 16:30）

著者略歴　1934　香川県に生まれる
1958　京都大学教育学部教育心理学コース卒業
1959　香川県児童相談所心理判定員
この間、教護院と精神衛生センター勤務
1981　香川県児童相談所所長（婦相所長・精更相所長兼務）
1989　徳島文理大学
1993　徳島文理大学退職

現　　在　余生を楽しみながら少しずつ次のような活動もしています。
子供の問題等の相談活動、講演、初級産業カウンセラー養成、『不登校児をもつ親の学習会』主宰とそのカウンセラー研修講座主催、エンカウンター・グループ、著述等の活動。
資格　臨床心理士（日本臨床心理士認定協会認定）
カウンセラー（日本カウンセリング学会認定）
中級産業カウンセラー（労働省承認）

著　　書　1985　『親と教師が助ける登校拒否児の成長』　黎明書房.
1987　『子供の非行に気づいたら』　黎明書房.
1992　『不登校児から学ぶ－子ども・親・教師の成長のみちすじ』黎明書房

主要論文　1986　登校拒否児の治療－とくに児童の変化過程を中心に－　心理臨床学研究　4(1) 3-14.
1993a 不登校児の親の変化過程仮説　心理臨床学研究　10(3)17-12
1993b 来談者から学ぶ対人援助者の成長　人間性心理学研究　1 1 (1)　83-95

著　者　〒767　香川県三豊郡高瀬町大字上高瀬1，112－2
連絡先　☎0875（72）4020　FAX 0875－72－3987
（この冊子についてのご批判、ご教示、ご感想、ご質問をお寄せ下さい。
生きている限り、ご返事を差し上げます。著者。）

人間関係研究会資料　No.11
発行者　人間関係研究会
〒145　東京都大田区上池台1-34-26　渡辺協子方
TEL　03-729-3622　郵便振替　東京 9-37428
印刷所　〒769-15　香川県三豊郡豊中町　大西プリント社
初　　版　1988年 1月15日
第　2刷　1989年 2月20日
改定増補　1994年10月15日
著　者　〒767 香川県三豊郡高瀬町大字上高瀬1,112-2
© 小　野　　修